

---

# 代打黒猫

岡崎やすはる

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

代打黒猫

### 【Nコード】

N4177D

### 【作者名】

岡崎やすはる

### 【あらすじ】

一年ぶりに帰った実家は、何も変わっていないかった。一年前と同じ父の横顔に、母の鼻歌。独り言と、動物と友達になる方法を得て帰ってきた私が出会った少し変わった代打と、嫉妬した言葉の話。

バッターの脛辺りに150キロ近いストレートが直撃した。観客はざわめき、テレビは額の汗を拭う当てたピッチャーの背中と、脛を押さえてうづくまるバッターを映す。

「ああ、おい、頼むぞ！ 立て！」

父が、ブラウン管の向こうへ吠えた。

「お前の代わりは居ないんだからな！」

ひいきの選手なのか、力が入っている。お前の代わりは居ない。そんなこと、言われたこともない。父の中での私の存在価値は、あのテレビの向こうのバッター以下なのかな。一人暮らしを始めて一年、久々にこの実家に帰ってきたのに、父とはまだ、まともに会話を交わしていない。「ただいま」「ああ」「元気？」「んん」とか、せいぜいこのくらいだ。

なんとなく一年前と同じ場所に座る父の顔を見ても、こちらを向く気配の無い横顔からは、少し老けた気がするだとか、酒の入ったコップを一時も手放さないだとか、そんなことしか発見できなかった。そういえば、一年前に家を出た時、最後に見た父も横顔だった。

立ち上がってみる。それでも横顔は横顔のままだった。私は適当に歩き出し、気付けば、キッチンに来ていた。お母さんが、洗い物を鼻歌交じりにこなしている。

「ねえ、母さん」

「なに？」

お母さんも私に振り向かない。

「……なんでもない」

「どうかしたの？」

「暇だったただだから」

「なんでか、お母さんは笑った。ただその後あといくら待っても話しかけられなかったから、私はキッチンを出て、玄関に向かった。近頃では珍しくなったガラス戸の玄関を引いて開けると、夜のくせに月も出ていない空が私を迎える。なんだ、お前まで私を見てくれないのか、とか思ってみたり。」

「サンダルを履き空を見上げながら一歩足を踏み出すと、「むぎやあ！」と、何かが鳴いた。驚いて咄嗟に足を退けた場所には、黒猫が居た。抗議するように私を見ている。黄緑色の目が私に何か、語りかけようとしていた。「私の体が黒くて夜には見えにくいからってな、少しは気をつける」、ってところだろうか。そう言ったことにした。」

「ごめんね」

手を伸ばしても逃げない。毛並みは良いようだった。毛はサラサラと尻尾へ向けて流れ出していて、それに沿って撫でると、なるほど。病み付きになりそう。しかし、なんでこんな場所に黒猫が居たんだろう。首輪は着けていないから、キミは野良か。」

「あーお」

「やっぱり言葉は喋れなかった黒猫は、今度はこういう鳴き声で私に何か語りかけた。餌かな。寒いのかな。どっちだろう。」

「黒猫にそう問いかけても返事はないので、仕方なく自分で、「餌だよ、ご飯を頂戴」と変な裏声で言っ、私は黒猫の代弁者になった。振り向かない人間よりも、自分でセリフを決めれる猫の方が、私の話し相手には合っている。」

「そうか、餌かあ」完全なる一人二役。私は冷蔵庫の中身を思い出します。「……何かあるのかな」思い出せなかった。いかんせん、一年もブランクがある。うちの冷蔵庫の中身を忘れた代わりに私は、独

り言と、動物と友達になる方法を覚えたのかもしれない。

あんまり待たせると猫が逃げる気がして、私はキッチンに向かった。洗い物は終わったのか、お母さんはもう居ない。

冷蔵庫を開けてもあつたのは、猫に食べさせるには向いてなさそうな物ばかり。最後の希望を胸に、私は横顔の野球応援会場に向かった。

あつたのは横顔と、横顔の後ろに座る母と、酒のつまみなのか、小さく切られたかまぼこ。

「なんだか寒いわね」

母が振り返った。そういえば玄関を開けっ放しにしてきてしまったなと思いつながら、かまぼこを一切れつまむ。

「あら、くろちゃん」

チツチツチツチ、母が舌を鳴らしながら手招きする。黒猫が、家の中に入ってきていたのだ。

「くろちゃん？」そのセンスに否定の意を込めて、疑問形で問い返した。「あの黒猫の名前？」

「そう、もう何ヶ月も餌をあげてるの」

私はとりあえずその、『くろちゃん』とすれ違って玄関を閉めてから、戻ってきた。

くろちゃんはさつきまで私が横顔を眺めていた座布団の上で、かまぼこを頬張っている。

「その子、その場所がお気に入りなの。ごめんね」

適当に返事をしながら、座る場所を探す。座布団は三枚しか出てないし。仕方なく母の隣に、正座して座る。あ、かまぼこをつまんだまま、まだ持ってた。

見るとくろちゃんは、どっしり座って動く気配がない。この座布団は私の物。丸まって落ち着いた態度がそう、私に言う。

……私の、居場所は？

「寂しいからってね、この人が餌付けしたのよ」

「は？」

横顔の耳に届かぬようにか、小声で言う。

「あなたが居なくなつて寂しいからって、何も猫をそこに置かなくてもねえ」

「……」

この位置からは、父は背中が少し丸まった後姿しか見えない。背中は何も語らない。

「私の……代わり？」

「そう……なのかしら」

代打、黒猫？ いや、代走？

それはともかく、まさかこいつが私の代わりだったとは。

私はなんとなく、父の横顔を覗き込んだ。

「たまには顔見せろ」

「え？」

テレビを見遣つたままの横顔が語るとは思つてなくて、少し驚く。

「お前の代わりは居ないんだからな」

「……はあ」

嫉妬したその言葉に私は、変な返事しか返せなかった。こんなことを言う人じゃないのに。きっとお母さんが父のぼやきをキッチンで聞いて、私の態度を見て、入れ知恵したに違いない。証拠に、楽しそうに笑っている。

「……わかった」

私はつまみっぱなしだったかまぼこを、ようやくくろちゃんにあげた。

「また帰ってくるよ」

横顔はもう語らない。お母さんはまだ笑顔だ。黒猫は。

「……」

かまぼこを食べながら、私を見る。「酔っ払いの相手は大変なんだから、たまにはお前が相手をしろ」。そう言っていた、ことにする。

「はいはい」

## 代打黒猫

その代わり頼むぞ、代打黒猫。

「あーお」

やっぱり喋れなかった黒猫は、こつこつという鳴き声で私に答えた。

(後書き)

スポーツ中継好きとしては寂しい季節です。とつとと春になればいいのに、と思いつながら書きました。この話の季節のイメージは春ですが、多分伝わりませんね。

なんだか雰囲気古臭いお話に最後までお付き合い頂き、どうも、ありがとうございました。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4177d/>

---

代打黒猫

2008年11月7日08時00分発行